

小説に流れる時間

若松伸哉（日本文化学部国語国文学科）

◆物語の時間

実際の世界のなかで起こる出来事は必然的に時間を伴っており、出来事を語っていく虚構の物語にもまた常に時間は存在している。しかし現実の時間が過去から未来へと不可逆的にしか流れないのに対して、我々が目にする物語における時間の姿はさまざまなあり方を見せている。我々の前にある物語たちは素朴な時系列に沿って描かれることはむしろ少なく、現在から始まりながら遡及的に過去に戻ることもあれば、過去・現在・未来が錯綜しながら語られる複雑な物語も存在している。現実の時間が極めて線的（リニア）に流れるのに対して、虚構の世界における時間は複雑に構成され展開されているのだ。

◆ジェイムズ・ジョイス「ユリシーズ」の試み

アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイス（1882-1941）の「ユリシーズ」（1922）は世界的に著名な長篇小説であるが、この小説全体が古代ギリシャの詩人ホメロスによる長編叙事詩「オデュッセイア」を下敷きにしている。「ユリシーズ」は主人公である中年レオポルド・ブルームのダブリンでの1日を描いた小説だが、このブルームの存在が英雄オデュッセイアのパロディとなっており、ブルームの1日はオデュッセイア20年におよぶ旅のパロディともなっている（主人公ブルームは英雄オデュッセイアに重ねられつつも、落差のある人物となっている）。ブルームの過ごす1日のなかにはオデュッセイアの20年に対応する出来事があるのだが、注目したいのは「オデュッセイア」という著名な物語を下敷きにすることによって、「ユリシーズ」における1日は20年という時間を含みこんでいることである。そしてブルームの物語は、常にオデュッセイアの物語に支えられつつ、差異をあらわし、読者のなかで交錯する。この小説では単線的な時間感覚を逸脱した物語が展開されているのである。

◆石川淳「佳人」の方法

最後に触れたいのは日本の作家・石川淳（1899-1988）である。石川淳は1935（昭和10）年に小説「佳人」によって文壇に登場するが、この「佳人」の主人公「わたし」は自身のあり方について「ユリス」（オデュッセイア）との落差を示唆しており、「オデュッセイア」のパロディとしての「ユリシーズ」をさらにパロディとして踏まえる「佳人」の姿が浮かび上がる。ジョイス「ユリシーズ」は昭和初期の文壇において盛んに翻訳が行われた小説であるが、そもそもパロディという性格を持つ「ユリシーズ」を、「佳人」は同じパロディというかたちで取り込むのである。「佳人」の主人公「わたし」は、「ユリシーズ」のブルームの時間を含み、さらに英雄オデュッセイアの時間を二重三重に含みこむのだ。そして「佳人」の主人公「わたし」が示すのは、「ユリシーズ」との関係だけではない。作中でこの主人公は、やはり当時日本文壇で言及されることが多かったフランスの作家・ヴァレリイを模した振る舞いをするし、中世ヨーロッパの聖フランチェスコや中国の竹林の七賢のあり方との関連も作中で言及される。そのほかにも「佳人」の「わたし」が踏まえているとおぼしき文学作品や人物も複数指摘されているが、重要なのは「佳人」の主人公が複数の文学作品や人物を重層化している存在であり、これらの重ね合わせられた作品や人物の時間もまたこの「佳人」という作品のなかで流れていることである。

線的（リニア）な時間を脱する小説のあり方は、このようなかたちでも試みられているのだ。

不安と生の研究会